British English の最近の発音変化に関する一考察
——Received Pronunciation と Estuary English——

大 森 裕 實

A Study on Some Characteristic Properties in Contemporary British English: Received Pronunciation and Estuary English

Yujitsu OHMORI

序

言語研究の分野で20世紀後半から急速な発展を示している領域のひとつに社会言語学(Sociolinguistics)をあげることができよう。これは、近代言語学の祖ともいうべきソシュール(Ferdinand de Saussure: 1857-1913)によって社会的コードとして位置づけられ、言語研究の対象としての優先権を与えられたラング(langue)の領域から、具体的な社会の場における言語使用として位置づけられるパロール(parole)の領域へと学際的に言語研究が拡張している様相を端的に表わしている。この趣の言語変異を扱う分野は、旧来の枠組みでは、方言学(Dialectology)や文体論(Stylistics)の一部として位置づけられてきたものであるが、米国にラボフ(William Labov: 1927-)が、また英国にトラッドギル(Peter John Trudgill: 1943-)[1] が登場するに及んで、その研究調査結果分析と当該分野に衆目を集めることになったといえる。

1960年代米国におけるラボフの2つの研究——ニューヨークにおける/r/音多用化の傾向調査と、マーサス・ヴィニャード島における特定二重母音の古型保持の傾向調査——は、エイチソン(Jean Margaret Aitchison: 1938-)の言葉を借りれば[2]、意識上の変化(前者)と意識下の変化(後者)を明らかにしたものと評価できる。また、1974年のトラッドギルの名著 *Sociolinguistics: an Introduction to Language and Society*(『言語と社会』土田滋 訳, 1975)では、英国人に関する通説——列車のコンパートメントに見知らぬ者同士が乗り合わせた場合には必ず天候の話から始めるという現象——に関して、言語行動の2つの側面、すなわち、さまざまな社会的関係を結ぶための言語の機能と

いう側面と、話し手についての何らかの情報を伝えるという言語の役割という側面が融合した、言語と社会との間の密接な相互関係を反映した事象であると指摘される。米国のラボフも英国のトラッドギルも、地理的(地域的)変異と社会的(階級的)変異の 2 つの軸を設定して、言語の変化をその座標の上に投射しようと試みる。言語の変化は通時態上の概念ではあろうが、共時態上はそれが言語変異となって具現されているという社会言語学的観点に特徴がある。

ところで、社会言語学的観点が一般化してくると、 標準語(standard) vs 方言(dialect/regional)という誤解を招きそうな、実際、一般的には誤解を生んできたに違いない言語に関する二項対立的図式[3] は修正を迫られ、 現在では、従来「標準語」と称されてきたものは、実はある特定言語集団の有力な 1 つの変種(variety)に過ぎないとみる、集合型の図式が定着するようになってきた。英語を例にとると、いわゆる変種(variety)の幅は地域的にも実に広範囲に亘ることが分かる。母語または公用語として、イギリス英語、アメリカ英語、カナダ英語、オーストラリア英語、ニュージーランド英語、アイルランド英語、南アフリカ共和国英語など、また、第二言語 (第二公用語) として、インド英語、フィリピン英語、シンガポール英語などがすぐに念頭に浮かぶであろう。このような広範囲の集合体の中では、英国「容認発音」(Received Pronunciation)も米国「一般アメリカ語」(General American)も数多ある英語変種の中のone of the varietiesに過ぎないということになる。最近では、この趣の潮流を反映して、*World Englishes* という新しい語句までしばしば聞かれるようになった。英語は今や単一固有名詞の English であるとは限らない。

そこで本稿では、英語の変化を正確に把握する一助として、通時的言語変化の問題を社会言語学的観点に立脚する共時態的変異の問題として再認識しながら、世界の英語やアジアの英語といった広範囲の現象を視野に含める巨視的視点とは別のアプローチで、イギリス英語の中の顕著な変種、特に、Received Pronunciation という有力変種の変容と、若年齢層が多用し Estuary English と称される最近の変種特徴について記述分析し、その実態を明らかにしようと試みるものである。この趣の微視的視点からの社会的言語変異の記述も、巨視的視点と併せて、特定言語の姿を過不足なく理解する際の不可欠のアプローチであろうと確信する所以である。

言語は若年齢層方向に変化するのか？
—— Queen's English の最近の動向 ——

学術科学雑誌 *Nature* 12月号(No.6815)に、英国女王エリザベスII世の発音変化について、オーストラリア Macquarie 大学の J. Harrington 教授と他2名が音響分析した結果が "Does the Queen speak the Queen's English?" という奇をてらった表題の下に掲載され (pp.927-8)、それが *The Times* をはじめとする主要メディアで採りあげられて話題となった[4]。

当該記事の梗概は——いかなる言語も時代の推移に伴って徐々に音声変化を起こすことは周知の事実であり、多くの場合、当該言語社会における若年齢層の発音変化に起因する。高年齢層は無意識のうちに、若者世代の新しい発音を受け入れていくことになるが、このことは英国エリザベス女王の場合においても不可避であることが判明した。1950年代から1980年代に放送された年1回のクリスマス・メッセージの母音フォルマントを比較分析した結果、1980年代では英国南部標準発音(Standard Southern British)[5] に近づいていることが分かった。このSSBは多くの点で女王の英語発音と類似するが、その話者は中流社会階層や新世代であり、今日 BBC 発音として容認されているものと同質である。調査した11母音の内10母音に揺れが認められ、さらに5母音については顕著な変化を示している。女王の1980年代の発音は1950年代のものとSSBの中間に位置しているのが特徴的。もちろん現時点では、全体としてみれば、女王の英語発音がSSBと一線を画していることは明確だが、少なくとも 1950 年代の女王自身の Queen's English と同じものを発話されなくなってきているのは事実である。果たして、Queen's Englishのような英語の一特異形が、社会変化の影響に抗して存続できるであろうか——という主旨である。さらに、これを補足したニュース記事によると、例えば、女王の "had" は1950年代には "bed" と韻をふむ母音発音であったが、1980年代に "bad" と韻をふむ母音発音に変化してきており、これは明らかに女王自身の Queen's English が SSB へ偏向しつつあることを証左するものであると指摘する。

ところで、エリザベス女王に看取できる発音変化を、社会変動に伴う自然な言語変化の一環とみるか、英国王室の人為的施策の一環とみるかは、意見の分かれるところであろう。稀代の音声学者 Daniel Jones の著わした *English Pronouncing Dictionary* を改訂したレディング大学の Peter Roach 教授などは、王室メンバーが自分自身を指す "one" という代名詞の使用をやめた経緯を事例にあげて、王室メンバーがその特異性によって社会的ターゲットにされ

ないための社会的順応方策の一例であるとする興味深い見解を開陳しているが、どうやらそれは少数派のようである。それでも、英国の上流若年齢層がその特権階級的イメージと直結して連想されるのを嫌って(あるいはそれによるイジメを回避して)「容認発音」(RP)を拒み、Cockneyあるいはそれに類似した音声特徴をもつEstuary Englishを多用する事実と照らし合わせると、教授の説はそう簡単に否定はできない。

そもそもQueen's Englishとは何か。King's Englishと等価だとすると、この際King's Englishが本来もつ含意のことは議論の傍らにおいて[6]、それは「英国臣民が話すべき正当な英語」の意から一般化して「教養ある知識人が使う南部イングランドの標準英語」のことを意味すると定義づけられる[7]。この定義における「教養ある知識人」とはパブリックスクールで教育を受けた者の総称であろうし、「標準英語」とは容認発音(RP)を含む容認標準語(Received Standard)のことであろう。もしそうであるならば、教養ある知識人の若年齢層が容認発音離れを起こし、RPがBBC発音と同定され国際的放送媒体での使用に応えるものとなり、さらに英国王室次世代を担うであろうウィリアム王子が様々な社会階層の人々と南米チリで共同生活を経験する現在、王室の英語発音に変化が生じるとしてもあながち不思議なことではないが、それが在位50年を誇り、Queen's Englishの象徴たる女王エリザベスII世の身に生じている点が耳目を集めるところであろうか。Queenがみずからの Queen's Englishを変容させて、いわゆる広義の現代版Queen's Englishに接近するとは、主客転倒の現代世相を反映していて皮肉なことであるといえるが、別の観点からすれば、若年齢層に高年齢層が歩み寄るのは言語変化の自然な流れであるともいえる。

英語に何らの英米語的標準など認めない立場の人にとっては、誰が「純粋正統派の英語」を話そうがあまり意味のないことかもしれない。そしてこれは、言語の研究者や英語教育の関係者を除けば、英語母語話者一般にとっても同様であろうことは、容易に想像がつく。

しかし、結局、本章で問題としたエリザベス女王に看取できる発音変化の現象を自然な言語変化の一環として位置づけてみれば、意識下における同時代の一般標準変種への傾倒ということになる。同じ意識下の変化といっても、これは、序章で言及したマーサス・ヴィニャード島の保守的発音変種への先祖返りの現象[8]とは一見趣を異にするように思われるが、どちらの現象も根本のところで若年齢層が当該変種の中核的役割を担っていることに着目しておきたい。

Received Pronunciation は虚像か実像か？
—— 定義とその変容 ——

イギリス英語において誰もに理解されるような「標準変種の発音」を求めれば、それは「容認発音」(Received Pronunciation)ということになろう。もっとも、この術語は言語学関係の専門用語であるため、一般には*the King's English* や *the Queen's English*、*BBC English*、*Oxford English*、*Public School English*と呼ばれる変種とほぼ等価と見なされているのではないかと思われる。もっと日常的なレベルでは、中流階級からは*BBC accent* とか *public school accent*と、また労働者階級からは*talking proper* とか *talking posh*と呼び慣わされている類のものである。イングランドではこの変種を単に *Standard English* と言ってみたり、本当は上流階級でない者がこの変種を真似る場合には揶揄して *la-di-dah* とか *a cut-glass accent* と言ってみたりする[9]。いずれもRPの具体的なvarietiesであると認識される。ただし、前述の社会言語学者トラッドギルの革新的な記述に従えば、真の意味での RP 話者は英国全人口のわずか３％に過ぎないということになるが[10]、これはあまりに極端な数字であり、氏の調査地域の偏りの問題もあって、一概に信用はできない。しかし、ここから推測して、全人口の10％未満の英国人が使用している変種がRPということになるのではないか。それでは、地域的変種、社会的変種の入り乱れるイギリスとはいえども、全人口の１割にも満たない使用人口数の変種がいわゆる標準語的規範性をもった優勢変種として認定されるためには、いかなる定義づけが可能であろうか。*A Grand Dictionary of Phonetics*(1981)の定義するところでは、RP is abbreviation for Received Pronunciation. A style of English pronunciation widely received as standard in Great Britain. と古めかしく、現在の視点からみると、音声学の専門辞典の記述としては不十分さを露呈してはいるものの、それに続いて、Although RP is not decided officially as standard in U.K., it is considered to be an average style of English pronunciation, which is represented by BBC or the pronunciation adopted in D. Jones' *Pronunciation of English.* とその実態を記述する形式で補足説明がある。さらに、その規範性をめぐっては、外国語学習の観点から、RP forms a basis or a norm for the teaching of English as a foreign language.と位置づけているが、RP がどのような基準で設定された概念であるかは分からない。

事実、Henry W. Fowler, *A Dictionary of Modern English Usage* (1965²) では、It (RP) is readily recognizable but not easy to define; nor are its

boundaries sharply marked.という記述が見受けられる。Received Pronunciation という術語が初めて文献に登場するのは Alexander J. Ellis, *On Early English Pronunciation* (1869)においてであり、これは小文字で表記される一般的語句として「イギリスの至る所で大きな地域的差異の見受けられない容認発音のことを指し、ある程度の変種は認められるものの、大都市部や裁判所、教会説法の際に使用される教養のある発音」という、地域性ではなく社会階層性に重きをおいた定義、すなわち、社会的基準に基づく定義となっている。しかし、一般にRPの定義はロンドン大学音声学教授Daniel Jones編纂の *English Pronouncing Dictionary* (1926[3])によって広く定着したものと考えられている。もっともそれに先行して、Henry C. Wyld, *A History of Modern Colloquial English* (1920, 1936[3])に Received Standard English という名称も確認できることは銘記しておかねばならない[11]。当初ジョーンズはより厳格な変種を想定しており、氏の英語発音辞典の第 1 版(1917)では、PSP (Public School Pronunciation) という「イングランド南部出身でパブリックスクールで教育を受けたロンドン近郊に居住する人々の間の日常会話で一般に聞かれる発音」と定義していたが、第 3 版(1926)においてPSPからRP「容認発音」という名称に変更し、氏の英語発音辞典に採録する英語変種の幅に若干の修正を施した。とはいえ、Received Standard English も Public School Pronunciation も、また最近の SBS (Southern British Standard)[12] という名称にしても、いずれも class dialect (階級方言) という social variety に重きをおいた、換言すれば、社会的基準 (縦軸の基準) を尺度として設定された概念であることは、ここで改めて強調しておかねばならない。

しかしここで視点を変えて、地域的基準 (横軸の基準) を考慮してみることも重要であろう。*Oxford Advanced Learner's Dictionary* の第 3 版(1974)は、発音部門を Gimson と Ramsaran[13] が担当しているが、この版では General American「一般米国語」に対応する概念として、General British「一般英国語」なる名称が造語されていて興味深い。というのも、GAの設定基準から推測して、それに平行する GB の提唱ということは、地理的観点に基づく最大公約数的実体を考慮しなければ生じないと思われるからである (ただし、OALD の後続版では GB という概念の継承が行なわれたとは認められない)。確かに RP は、15 世紀末における英語標準文語の成立とも関連して、その成立基盤を「イングランド中部南東方言」においていることに間違いはない。仮にRPが純粋に非地域的変種であるとすると、デヴォン方言、ウェールズ方言、ノーサ

ンブリア方言等と明瞭に区分できるのは何に起因するのかという反論が生じてくるように思われる。しかしだからといって、現代のRPがその地域的基盤としたロンドン近郊の変種と常に類似特徴をもっているとは限らないのも事実である。例えば、RPが[h]発音を保持するという点において、これは明らかにロンドンやエセックス地方の発音とは異なっている。また、放送媒体の大きな影響により、リヴァプール発音、コックニー発音、アメリカ発音をもつ若年齢層に類似性が見られることは、RPを今もってイングランド中部南東方言を基盤とした有力変種であると地域的基準で位置づけるには無理のあることを示唆していよう。

さらに加えて述べるなら、社会言語学的観点とは異なるが、純粋に言語学的基準（音韻論的基準）に基づいてRPを定義することも可能かもしれないが、これについては何をRPの特徴的発音として認定するかが言語学者によって異なるという問題点を孕むことになり、RPというような数多の変異を内包するパロールの問題への接近方法としては、必ずしも説得力のあるアプローチであるとはいえない[14]。

このように、RPは第一義的に（regional dialectではなく）social dialectであることが理解できるが、それが社会的価値と密接な関係をもつ言語変種である以上、固定的で安定した存在とは考えられない。事実、Standard VarietyとしてのRPの今日的位置づけは明らかに変容してきている。そのことはAlfred C. Gimson, *An Introduction to the Pronunciation of English* (1980³)とその実質的改訂第5版であるAlan Cruttenden, *Gimson's Pronunciation of English* (1994)におけるRPに関する記述の改訂箇所において示唆的に現われている。第3版において、"The BBC formerly recommended this form of pronunciation for its announcers mainly because it was the type which was most widely understood and which excited least prejudice of a regional kind." (p.89)とあった箇所は、現在ではBBCがもはやRPを推奨していない事実をより強調する表現"The BBC used to recommend this form of pronunciation for its announcers ..." (p.78)に改められている。また、RPの中のさらなる下位分類として、第3版では、*conservative* RP (the older generation, certain professions or social groups); *general* RP (most commonly in use: adopted by the BBC);*advanced* RP(young people of exclusive social groups: the upper class, certain professional circles)の3変種が記載されていた(p.91)が、第5版では、General RP; Refined RP(the upper-class); Regional RPの

3種類に修正区分化された(p.80)。特に最後の変種 Regional RP は、ここ数十年の RP をめぐる議論——RP が今なお社会階層を反映した変種かどうかということ——に対する、ひとつの有力な見解を提示しているともいえる。"The concept of Regional RP reflects that there is nowadays a far greater tolerance of dialectal variation in all walks of life, although, where RP is the norm, only certain type of regional dilution of RP are acceptable."(p.81)(本章引用箇所の下線はすべて筆者による)。

結局のところ、RP は虚像であり、かつまた実像であると結論づけるしかない。それは、ある意味では Jones による *Cardinal Vowel* が虚像であるのと酷似している。抽象的な体系とは別に、個々の状況に応じて母音は具現される。RPも抽象的な理想的標準変種といえなくもないが、それは同時に、言語社会において、*BBC English* や *Public School English* というような具体的な実像を伴って顕在化するという側面からは実像としてとらえることが可能ということになる。

現代 RP アクセントの指向性の変化について
—— LPD 新旧版(1990 年版 vs 2000 年版)の対比から ——

イギリス英語の発音辞典としては、RP を採録した Daniel Jones 編纂の *Everyman's English Pronouncing Dictionary* (1917-1977[14])が信頼性が高く、何度も改訂され、また版を重ねてきた。特に、第 13 版では Jones の高弟 Alfred Charles Gimson (1917-1985)により全面的な大幅改訂がなされたことはつとに知られた事実である。この発音辞典は現在では出版社を CUP に移し、Peter Roach と James Hartman とが共同編纂して第 15 版(1997)として蘇った。しかし、第14版(1977)が改訂出版されてから20年近くの歳月を要したため、その間に新種にして進取の発音辞典が上梓され、それに高い評価が与えられることになった。それこそ、Jones、Gimsonと続いたロンドン大学音声学講座の継承者にして幅広い視野をもつ John Christopher Wells (1939-)の編纂した *Longman Pronunciation Dictionary* (1990)である。

Wells 編のこの発音辞典には、従来の発音辞典には見受けられなかったいくつかの新機軸ともいうべき特徴を看取することができるが[15]、とりわけ「意見調査資料」(Opinion Polls Data)分析の導入は、英語使用地域外で英語発音の習得や教授に努めている者にとって資するところが少なくない。ここでいう「意見調査資料」とは、数種の変異発音をもつ100語近くについて英国各地

の 275 名の母語話者に問い合わせた（1988 年 11 月と 1989 年 2 月に実施した）結果を百分率（%）で記載したものである。調査協力者の内訳について記すと、①年齢層：年齢 15-80 歳以上の男性 149 名(54%)、女性 126 名(46%)、②被検者の地域性：254 名(92%)はイングランド人(北部イングランド 103 名 / 南部イングランド133名)、ウエールズ人10名、スコットランド人11名、③被検者の社会階層性(職業別)：音声学・言語学の専門家62名、大学・高校他の教員 51 名、ロンドン大学の学生 40 名(主として言語専攻者)、アナウンサー・俳優31名(主としてBBCのラジオ関係者)、音声関係の科学者・技師13名、一般人 78 名(高等裁判所判事・外交官・コピーライター・ステンドガラス職人など)[16] である。筆者はかつて「意見調査資料」分析結果についてLPD旧版(1990)を精査して85例を確認し、それらの語彙の中から主強勢の変化に関わる28語に焦点を当てて、そこから看取できる現代 RP 発音の実態を記述し、現代 RP に生じている強勢変化の動向分析を行ない、その結果を「RPアクセントの指向性の変化に関する一考察」(1997)という論文に纏めて公表したことがある[17]。

LPD旧版(1990)は確かに好評を博し、「意見調査資料」に基づく結果を記載するという新機軸も興味深かったのだが、上述の概要からも判断できるように、さすがに調査に協力する英語母語話者の総数が少ないとの印象が否めなかったのも事実である。編纂者のWells自身がそのことを十分に認識しており、その後もOpinion Pollsを積極的に推進し、1998年には1,932名にまで英語母語話者の被検者数を拡張した。また、設楽優子氏の協力を得て、米語母語話者400名の調査も1993年に実施して、それらの結果をLPD新版(2000)に組み入れている。

本章では、主強勢に関して、LPD旧版(1990)で意見調査表示のあった全28語について、LPD 新版(2000)で再確認し、LPD 新旧版の対比(特に新版で補足検証されている現象)を通して、現代RPにおける強勢変化の傾向をさらに考察する[18]。なお、LPD 新旧版と同時に比較対照する対象としての辞書選定は、大森(1997)を踏襲して、まず同系統の RP を記述した EPD（*An English Pronouncing Dictionary*, ed. Daniel Jones, 1917)とその改訂 EEPD(*Everyman's English Pronouncing Dictionary*, rev. A.C. Gimson, 1977[14] ; rpt. with supplement. S.M. Ramsaran,1988[14])、米国語に関する唯一の発音辞典PDAE（*A Pronouncing Dictionary of American English*, eds. J.S. Kenyon & T.A. Knott, 1953[4])、米語について最も新しい音声情報の盛り込まれていると思われる RHD (*Random House Unabridged Dictionary*, ed. S.T. Flexner, 1987[2])、英米語を

問わず英語を学習する外国人に推奨すべき発音を1語につき1つ示すことを原則に定めた進取の英米語発音辞典 CPD(*A Concise Pronouncing Dictionary of British and American English*, ed. J.W. Lewis, 1972)、加えて発音記述に重きをおく学習辞典から、OALD (*Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English*, ed. J. Crowther, 1995[5])と英和中(新英和中辞典 *New Collegiate*, eds. S.竹林, M.吉川, S.小川, 1994[6]) [この辞典は『新英和大辞典 第5版』とまったく同じ発音記号を遵守している] を採用した。ただし、今回対象辞書から外したが、学習英和辞典として好評を博している『ジーニアス英和辞典 第2版』(ed. T.小西, 1994[2])には LPD の意見調査語彙記述からの情報が部分的に採り入れられていることを附言しておきたい。

<LPD 記載の意見調査表示語彙の検討>

主強勢に関して意見調査表示のある全28語について記述するが、特に強勢変化について解説が必要な場合にはその分析を試みた。なお、LPDの表示に従い、---は音節数を表わし、第一強勢は ˈ で、第二強勢は ˌ で、第三強勢のある場合には 。を使って、それぞれの音節の頭に表記することにする。ここではLPDで明記された主強勢に関する情報が、従来の出版年代の異なるさまざまな発音辞典(一部学習辞典を含む)において行なわれてきた表記の実態と比較対照し、個々の単語におけるRP強勢の歴史的変遷も併せて明らかにする。なお、LPD新版の情報は、英国語については LPD (2000) という表示で、また米国語については AmE の表示で組み入れてある。

1. applicable (LPD 2000)

-ˈ---	77%	OALD	84%
↑			
ˈ----	23%	EPD/EEPD/PDAE/CPD/英和中/RHD	16%

[解説] cómparable/compárable ; préferable/preférable のストレスパターンと同様に、語根の動詞形の強勢位置からの類推による。上記2語についても、EPD・EEPD・PDAE・CPD・英和中・RHD では ˈ---- のストレスパターンを明示。*cf*. Gimson & Cruttenden (1994[5]: analogical changes, p. 211). Michael Ashby が発音を担当した OALD[5] では最近の情報が盛り込まれている点に留意。

2. bouquet

-ˈ-	83%	EEPD/PDAE/CPD/英和中/OALD/RHD
ˈ--	17%	EPD

3. brochure

ˈ--	90%	EEPD/CPD/OALD	
-ˈ-	10%	EPD/PDAE/英和中/RHD	

4. caviar(e)

ˈ---	77%	EEPD/CPD/英和中/OALD/RHD	
ˌ--ˈ-	23%	EPD/PDAE	

5. cigaret(te)

			(AmE)
ˌ--ˈ-	85%	EPD/EEPD/PDAE/CPD/英和中/OALD/RHD	65%
ˈ---	15%		35%

6. clandestine

-ˈ--	61%	EPD/EEPD/PDAE/CPD/英和中/OALD/RHD
ˈ---	39%	

7. communal

ˈ---	68%	EPD/EEPD/PDAE/CPD/OALD
-ˈ--	32%	英和中/RHD

8. contribute

-ˈ--	73%	EPD/EEPD/PDAE/CPD/英和中/OALD/RHD
↓		
ˈ---	27%	

[解説] contribútion という名詞形の強勢位置と対比強勢位置を明瞭にするには ˈ--- のストレスパターンを好む傾向が増加。 *cf*. Gimson & Cruttenden (1994[5], p. 211).

9. controversy

			(LPD 2000)
-ˈ---	56%		60%
↑			
ˈ----	44%	EPD/EEPD/PDAE/CPD/英和中/OALD/RHD	40%

**AmE* では常にこの発音との注記が LPD にあり。

[解説] 米国語では kɑ́:ntrəvɝ:si のみ可能だが、英国語では議論の分かれるところで、kɔ́ntrəvə:si に代わって kəntrɔ́vəsi の好まれる傾向が増加中。従来は、ádmiralty/difficulty/éxcellency のストレスパターンと同様に ˈ---- をとっていたのだが（＝語尾の y の直前に 2 つの子音を伴う音節類型のことを意味するが)、post-vocalic/r/(controversy)が欠落するようになって、音節構造に変化が生じ、apólogy/facílity/rhinóceros と同類型のストレスパターンをとるようになった。*eg*. métallurgy vs. metállurgy.
cf. Crystal (1984 : why is life so stressful, pp. 89-90).

10. decade (AmE)

ˈ--	86%	EPD/EEPD/PDAE/CPD/英和中/OALD/RHD	93%
-ˈ-	14%		7%

11. defect (N)

ˈ--	86%	EEPD/CPD/英和中/OALD/RHD
↑		
-ˈ-	14%	EPD/PDAE

[解説] 2 音節から成る名詞形の場合、ストレス規則に基づけば ˈ-- が標準的だが、それに対応する同形の動詞が存在し、その原義を保持している場合には -ˈ- のストレスパターンをとり得る。*eg*. demánd/replý/addréss (演説).

12. demonstrable

-ˈ---	63%	CPD/英和中/OALD/RHD
ˈ----	37%	EPD/EEPD/PDAE

13. dispute (N)

-ˈ-	62%	EPD/EEPD/PDAE/CPD/英和中/OALD/RHD
↓		*名詞の場合に ˈ-- パターンの増加傾向のあることを EEPD が指摘。
ˈ--	38%	

[解説] Burchfield(1981)に依拠すれば、-ˈ- の方が推奨されるべきアクセントということになるが、Gimson & Cruttenden (1994[5], p. 211) や Crystal (1984, p. 88) の説明に拠れば、動詞・名詞同形語の特徴のひとつ「名前動後」のストレスパターンからの類推により ˈ-- が増加傾向にあるということになる。
eg. éxport (N) vs. expórt (V)/óbject (N) vs. objéct (V)/récord (N) vs. recórd (V).

14. distribute

-ˈ--	74%	EPD/EEPD/PDAE/CPD/英和中/OALD/RHD
↓		
ˈ---	26%	

[解説] (8)と同様、distribútion という名詞との対比強勢位置を明瞭にするため。
cf. Gimson & Cruttenden (1994[5], p. 211).

15. exquisite (AmE)

-ˈ--	69%	CPD/英和中/OALD/RHD	76%
↑			
ˈ---	31%	EPD/EEPD/PDAE	24%

[解説] ex·qui·site は英語の典型的ストレス規則である末尾第三音節 (antepenultimate) に従えば ˈ--- のパターンが予測されるが、例外的に -ˈ-- が増加傾向にある。
cf. Gimson & Cruttenden (1994[5] : rhythmic changes, p. 210), Bauer (1994 : change of stress, p. 102).

16. formidable (AmE)

-ˈ---	54%		32%
↑			
ˈ----	46%	EPD/EEPD/PDAE/CPD/英和中/OALD/RHD	68%

[解説] 他の-*able* 形の形容詞と同様のストレスパターンをとる傾向。語根の動詞形はないが(1)の場合と同様の類推によるもの。
Poldauf (1984 : derivation, p. 100) に拠れば、音節構造の類似した forgívable の模倣ということも考えられる。

17. harass (AmE)

ˈ--	68%	EPD/EEPD/PDAE/CPD/OALD	87%
-ˈ-	32%	英和中/RHD	13%

18. hospitable

-ˈ---	81%	CPD/英和中/OALD
ˈ----	19%	EPD/EEPD/PDAE/RHD

[解説] (1)(16)の場合と同様。Poldauf (1984 : §. 24.9.2, p. 100) に拠れば、-ˈ--- は第二次世界大戦後の米国語の影響によるとのことだが、PDAE (1953[4]) では "much less freq." との注記があり、見解の不一致。
使用頻度の高い inhospítabale からの類推による強勢転移の可能性もある。

19. ice cream

ˌ-ˈ-	66%	EPD/EEPD/PDAE/CRD/OALD
ˈ--	34%	英和中/RHD

20. increase (V)

-ˈ-	90%	EPD/EEPD/PDAE/CPD/英和中/OALD/RHD
ˈ--	10%	

21. increase (N)

ˈ--	92%	EPD/EEPD/PDAE/CPD/英和中/OALD/RHD	
-ˈ-	8%		
*(V)(N)のパターン	①	-ˈ- (V) / ˈ-- (N)	85%
	②	-ˈ- (V) / -ˈ- (N)	5%
	③	ˈ-- (V) / ˈ-- (N)	7%
	④	ˈ-- (V) / -ˈ- (N)	3%

22. kilometer (/-re) (LPD 2000)

ˈ--。--	52%	EPD/EEPD/PDAE/CPD/OALD	43%
↓			
-ˈ---	48%	英和中/RHD	57%

*論理的にはˈ--。-- ストレスパターンの方が標準的だが、*AmE* では -ˈ--- が増加傾向との指摘が LPD にあり。
cf. centi-metre, milli-metre.

[解説] Crystal (1984, p. 91) の指摘にもあるように *kilo-*を接頭辞としてとらえれば kílogramme と同様のストレスパターンで kílometer となるはずだが、他方、*-ometer* のつく語の強勢位置(*eg*. thermómeter, speedómeter, barómeter, gasómeter) から類推すれば、kilómeter となる可能性があり、この傾向が増加しつつある現象を看取することができる。

23. primarily

-ˈ---	51%	英和中/OALD/RHD
ˈ----	49%	EPD/EEPD/PDAE/CPD

[解説] *cf*. Crystal (1984, p. 87). *eg*. momentarily/temporarily.

24. research (AmE)

-ˈ-	80%	EPD/EEPD/PDAE(V)/CPD/英和中/OALD/RHD	22%
↓			
ˈ--	20%	PDAE(N)	78%

*大学教員の場合は95%：5%と保守的ストレスパターンを示すという点、また、英米語ともにˈ-- のストレスパターンの増加傾向にあるとの指摘が LPD にあり。

25. resource

-ˈ-		95%	EPD/EEPD/PDAE/CPD/OALD
ˈ--	(*sic*)	6%	英和中/RHD

26. spectator

-ˈ--	91%	EPD/EEPD/CPD/OALD
ˈ---	9%	PDAE/英和中/RHD

27. submarine (AmE)

ˈ--ˈ-	58%	EEPD/CPD/OALD/RHD	39%
ˈ---	42%	EPD/PDAE/英和中	61%

28. subsidence

ˈ---	53%	EPD
↓		
-ˈ--	47%	EEPD/PDAE/CPD/英和中/OALD/RHD

このようにLPD新旧版の主強勢に関する情報を検証してみた結果、米語情報を対象外とすれば、LPD新版で追加されたデータは、特にLPD旧版において、将来の強勢パターンに関する予測的判断が分かれると感じられた「語義の透明度(transparency)と末尾第三音節(antepenultimate)のバランス」の問題に焦点が当てられていることに気がつくであろう。Bauer(1994)に拠れば[19]、現代英語には英語の典型的ストレス型である末尾第三音節(antepenultmate)が崩れて、末尾第二音節(penultimate)に主強勢が移動している事例が多々見られる (docˈtorinal, exˈpletive, exˈquisite, gladiˈoulus, jubiˈlee, obscuˈrantist, subˈstantive<adj>, traˈchea, Uˈranus, uˈrinal, &c.)。それにもかかわらず、それとは逆行して、上述の「LPD記載の意見調査表示語彙」検討結果表の(1)*applicable* (9)*controversy* (22)*kilometer*はいずれも20世紀初期の第一音節に主強勢をおくストレス型から、現行の末尾第三音節に主強勢をおくストレス型に変化してきていることが、今回のLPD新版でも著しい数量的変化を伴って顕在化している。これらの変化を解析するに際しては、形態面からの語義の透明度という位相と、音声面からの強勢位置の変化という位相とのバランスが重要な観点になることに留意しておかねばならない。

(1)*applicable*については、動詞形applyとの語義的相関関係においても、また末尾第三音節強勢型指向性の面においても、新ストレス型が比較的浸透しやすいのではないかと判断される。事実、LPD新旧版を対比してみても、この10年間に新ストレス型支持が圧倒的に増加している傾向を看取できよう。ただし、音声学書においてapplicableと通常同類型として論じられるcomparable / preferableについては、LPD旧版では旧来型のストレス型が第一候補として採録されており、LPDの意見調査語彙の選定と表示の恣意性を感じないわけでもなかったが、今回のLPD新版でも事情は同じで、その点からは、同辞典に改善を求めたい。もっとも、comparable / preferableの場合には、ストレス型が異なると第二母音の音価が異なってくる点がapplicableとは事情を異にすることは承知しておかねばならない。それでも、appˈlicable

84%という数値は、同類型に関して、明らかに一つの潮流を示唆しているものといえる。英国系学習辞典 OALD(1995[5])が新ストレス型を採用しているのもその証左となろう。また、RHD[2]ではapplicable / comparable / preferable が採用されていることを指摘しておきたい。

(9)*controversy* については、子音/r/のもつ音価の変化に伴う音節構造の変化に起因するものと考えられるから、おそらく新ストレス型が浸透するものと判断されると大森(1997)で指摘しておいたが[20]、これについても LPD 新版の数値 60%はその傾向を裏打ちしている。

(22)*kilometer*については、*kilo-* の形態素としての重さを考慮するなら、新ストレス型が浸透するかどうかは疑問であり、LPD 旧版の 48%という数値は英国語話者にあっては今なお保守的傾向を保持していることを窺わせ、大森(1997)では将来どちらのストレス型に落ち着くか判断を留保せざるを得ない案件であったが[21]、LPD新版では米国語の影響がマスメディアを通して甚大であることが証左され、57%という過半数が新ストレス型を支持するという逆転現象を示した。(1)*applicable*の場合とは異なり、こちらの方は語義の透明度を軽視した(犠牲にした)結果であると分析できる。

イギリス英語の最新変種としての Estuary English

一般的にいって、日本で英語に関係する者の多くは、英国の Oxford 大学や Cambridge大学に行けば、今なお「正統派の英語」ともいうべきRPが普通に聞かれるという幻想を抱いているが、それは実態とは異なることを強調しておかねばならない。確かに、学部学科の教授陣やコレッジのフェローの大多数は Public School English の色彩の濃い英語を話していることも事実ではあるが、その学問の高水準と国際性に由来する国内外の人的交流の広さから、特に学生の話す英語に、伝統的 RP とは異なる特徴的な変種の存在を観察できるのである。殊に、ケンブリッジは地理的条件からいっても、ロンドン(King's Cross 駅)から列車で 55 分(約 80 キロ)の通勤圏にあり、その間には、Milton Keynes をはじめとする幾多のベッドタウンが急増している。おのずから、中世大学都市ケンブリッジといえども、ロンドンで流行となっている英語変種の影響を大きく被ることになることは想像に難くない。この趣の英語変種は(おそらく生粋のRP話者からは軽蔑的ニュアンスを含んで) Estuary Englishと呼ばれ、新聞・テレビでよく耳目にする名称となってきている[22]。

そもそも estuary という形容詞が示すように、イングランド南東部の話し言

葉といっても、ロンドンに基盤をおき、テムズ河口を中心とする英語変種がEstuary English であると定義できるが、その側面からだけとらえると、regional accent の一つであると位置づけられてしまう。しかし Wells (1994) に依拠すると[23]、その命名が示唆するように、この英語変種は RP と広義の Cockney (broadest London working-class variety)を両極におく**クライン**(連続変異スケール)の中間のどこかに位置する実体であると考えられる。このとらえ方だと、RP 同様に、social accent として定義するのが妥当ということになろう。ロンドン近郊の若年齢層に流行している新しい形の新世代版 RP ということが可能かもしれない。もっとも、Wells自身は単にLondon Englishと呼ぶのが適当であるとしている変種ではあるが、すでにEstuary Englishという名称は着実に定着しつつあるように思われる。

ところで、Estuary English (以下EE) なる新変種がRPとCockneyの中間のどこかに位置する存在であるというには、それ相当の根拠が必要である。ただし、文法的には極めてRP寄りであるといってよい。というのも、EEではいわゆる標準的な文法と慣用法を遵守している特徴があり、これはsocial accentとして Cockneyのようなレベルにはないことを証左している。また、語彙の面からどうかというと、例えば *thank you* や *goodbye* の代わりに *cheers* を多用するからといって、それが EE の特徴的語彙であるとは断言できない。RP 話者も日常的な語彙とフォーマルな語彙を区別して使用しているからで、*cheers*はいわゆるRP話者と認定される人も使用する。そうすると、事の核心はやはり音声面ということになろう。

Cockneyとは異なる音声的特徴として、Cockneyのもつ次のような特徴を EE はもたない (特徴的 3 点をあげる)。

① h 音の脱落：'and on 'eart; 'orse

② th 音[θ]の[f]音化：think[fink]; three[frei]

③ mouth 型二重母音[au]の単母音化：Southend[sahfend]

また、RPとは異なりCockneyに類似する次のような音声特徴をEEはもつ (特徴的 3 点をあげる)。

① 子音の前の[l]または語尾の[l]の母音化：milk-bottle[miwk botoo]

② 非音節頭部での[t]音の声門閉鎖音化：take i' off; make i' easy

③ name 型二重母音[ei]の[ai]へのシフト：Cambridge Station [kainbridʒ staiʃn]

これらの音声特徴の中で、筆者が実際に体験した EE 話者による発話で最も

気にかかる特性は、glottal stop（声門閉鎖音）の多用であり、これがRPを標準モデルとして習得した外国人話者にとってはコミュニケーションの障害となるといっても過言ではない。Wells（1994)に基づいて定式化すると[24]、t ＞ ?/[＋son]_{C, ##}となる。すなわち、/t/が/?/になる環境としては、当該音節に母音(この場合、/l/が変化した/o/も含む)かまたは/n/が先行し、かつ、語の切れ目か或いは/r/以外の子音が後続する場合ということになる。例示すると、bit＞b?? ; belt＞beo? ; bent＞ben? ; football＞?f??b?o ; Cheltenham＞?t?eo?n?m ; Bentley＞?ben?li ; stop it＞?st?p?? ; bullet-proof＞?b?l??pru?f など（いずれも Wells（1994)からの引用例)。従って、mattress という単語は Cockney では ?m??r?s という発音が可能であるが、EEでは上記の制約から、?m?tr?s という発音になるなど、Cockney 的特徴の glottal stop をもつとはいえ、それが顕在化する音韻環境が異なるという点でも、Cockney とは一線を画している。

本章ではEstuary Englishと呼ばれるイギリス英語の最新変種の特徴のほんの一部を紹介したに過ぎない。EE の存在が英国の若年齢層にとっては無視できない程度にまで浸透している現在、RPの将来とも関連して、その包括的記述の完成が社会言語学的見地からの期待を集めているともいえよう。

結　　語

本論考では、印欧語族ゲルマン語派の一角を占めながらも、20～21世紀の国際共通語（lingua franca）となった「英語」の言語変化を過不足なく記述分析し、変化の要因を明らかにするという透徹した目標達成ための一過程として、通時的変化の過程が共時的変異に具現されているとする社会言語学の立場に立脚して、British　English の 2 つの大きな変種――伝統的かつ同時代的な Received　Pronunciation と、最近の新種にして若年齢層に浸透してきている Estuary English――を採りあげて、考察を進めてみた。

言語の変化(不断の流転)は不可避の現象であり、これはある意味でイギリス英語の代名詞Queen's Englishの象徴たるエリザベス女王II世においても例外ではない。エリザベス女王II世の発話する母音が過去30年間にBBC英語とも呼ばれる中流階級の容認発音(RPあるいはStandard Southern British)に近づいていることが、オーストラリアの Harrington 教授他の調査により判明した。これは現代イギリス英語が他の言語同様に、変化の渦中にある、サピア流に換言するなら、自身の創る潮流に乗って drift しているということを表わしていて興味深い。世界的視野で鳥瞰すれば、もうひとつの大きな変種アメリ

カ英語でも、特にカリフォルニア州において、slangを中心に典型的な一過性の流行語を生み出してはいるが、概していえば、旧植民地には旧宗主国の移民時代の古形が温存されているものである[25]。アメリカ英語に特徴的な[æ]の発音も、元を質せば、エリザベス朝時代(17世紀)のイングランド東アングリア方言の*residue*である。こういった言語事実の発掘と解析に、方言学や社会言語学の真の意義と貢献が認められるといっても過言ではない。

翻って、イギリス英語の RP が今後どのような変容を遂げていくかを予見することは難しいが、社会階層の平板化、大学教育の大衆化（特に Oxford や Cambridgeの国際化と入学者数の増大)、移民の継続的流入が進行すれば、社会的(階級的)基準を第一義的拠りどころとする RP の将来的変化は決して小さくはないと思われる。本稿で記述分析した Wells 編纂の英米語発音辞典(LPD)の主強勢パターンの変化は、その辺りの事情を如実に表わしている。また、若年齢層に流行する EE も、変種特徴として、RP と Cockney を両極においたクラインの中間——文法的には RP、音声的には Cockney 寄り——の位置を占め、今後RPを脅かす存在であることは疑う余地がない。言語変化というものが若年齢層(次世代)が中核となって惹き起こされるという一般的特性に鑑みると、それほど遠くない将来に、新時代の容認発音として幅広く浸透する可能性も低くはないかもしれないし、また、英語発音辞典や英語学辞典の項目にレーマとして採録される蓋然性も高い。今後、その動向が注目される所以である。

最後に、変種(variety)とか方言(dialect)というものが、どれも等しい社会的価値をもっているかどうかについて附言して、本稿を閉じることにする。Trudgill は、いずれの方言(変種)も等価であると論断してはいるが、イギリス英語のように特異な社会階層に基づく変種(variety)が確認される場合に、そのいずれの変種も社会的に等価であるとは信じられない。これは事実である。RP 話者で構成される社会で、その他の変種も等価だからといって、RPを発話しないで果たしてコミュニケーションを確立できるであろうか。RP が放送媒体の変種である場合に、それを無視して、十分な社会生活が営めるであろうか。純粋に言語学的観点からは、いずれの変種も等価であると認定したい。しかし、社会言語学というような学際的領域において、現実の社会を考慮外においた机上の空論を展開することには、慎重な態度で臨まねばならないだろう。英語が国際共通語となっている現在、言語の多様性を認識し、英米語帝国主義に陥らないとするバランス感覚は必要不可欠だが、だからといって、RPを無視することはできず、英語音声習得モデルとして RP を設定することは正当に評価さ

れるべきである。むしろ肝腎なことは、言語は常に変化する*realite*(社会的実体)であることを自覚し、言語の実態に不断の注意と関心を喚起し、実際の変化に対して柔軟な心的態度を保ち続けることではないか。換言すれば、言語の変容に対して、ともすると陥りがちな規範的態度を改め、記述的態度を示すことではないか。その趣の意識改革を促すことも、今日の社会言語学に課せられた使命であるといってよいかもしれない。Ronald Wardhaughの提示する課題——*Is there an Applied Sociolinguistics?*——への解答もその辺りに見えてくるようだ。

註

1)ここでは慣例に従って、Trudgill氏をトラッドギルと表記した(『英語学人名辞典』の発音表記参照)。ただし、英米の学者の発音から判断すると、トラッジルとカタカナ表記した方が実際の固有名発音に近いように思われる(最近の例では、2001年10月20日にJACET中部支部講演会においてIs there an Applied Sociolinguistics?という標題のレクチャーを行なったカナダの社会言語学者Wardhaugh博士も[trʌdʒil]という発音であった)。

2)Jean Aitchison, *Language Change: Progress or Decay* (1991[2]), pp.49-61参照。

3)David Crystal, *The English Language* (1988), pp.185-188では英語文語「標準語」の成立要因が論じられている。中部南東方言が標準語化していく要因として、①面積と人口数による話者の絶対的多数、②政治・社会の中心地ロンドン(宮廷の存在)、学問の中心地ケンブリッジとオックスフォードという3大都市の存在(立身出世を望む人々が集まる条件が整っていた)、③羊毛貿易の中心的役割を果たした肥沃な農業地帯、④北部方言と南部方言とを結ぶコミュニケーションの架け橋の役割、⑤英国最初の翻訳印刷業者William Caxtonによる活版印刷術の導入とロンドンの話し言葉の影響の5点を列挙した後につけ加えて、このような社会的要因が複合的に作用して、15世紀末までには、中央(都会)の生活と田舎(農村)の生活の差別化が明瞭になり、そのことが起因して、人々の意識の中に、標準語的話し言葉と地域的(方言的)話し言葉を区分する意識——標準語は正確で適切で教養あるもので、他方、方言は不正確で不注意で劣ったものであるとする二分法——を定着させる結果となったに違いなく、不幸にしてこの意識は現代人の中にも脈々と受け継がれているとの指摘がある。なお、上述の文語標準語の成立要因については幾分不正確な記述であることを拙稿「英語の言語変化にみる社会言語学的要因」(1995), 註(5)(7)(9)で指摘してあるので、参照されたし。

4）関連記事についてさらに詳細を知りたい場合は、Harrington 博士作成の Web Site http://www.shlrc.mq.edu.au/queen.html までリンクされたし。

5）この名称については Wells & Colson, *Practical Phonetics*（1971）参照のこと。

6）『新英語学辞典』（研究社，1982）の King's English の項目と、その記述が根拠としている OED[2] に依拠すれば、King's English は元来は良くない意味をもつ成句の一部であり、初出例は Shakespeare（1598）。その後、徐々に規範的含意をもつようになったと考えられる。

7）『新英語学辞典』King's English の項に拠る。

8）Martha's Vineyard 島において、特定二重母音/ai//au/が中舌母音化する傾向を調査した結果、調査対象の69人の島民の中で31－45歳の年齢層が85％という最高値を示したこと、またその原因が島に対する誇りと愛着心によることを Labov が *The Social Stratification of English in New York City*（1966）で公表した内容。

9）Tom McArthur（ed），*The Oxford Companion to the English Language*（1992），Received Pronunciation: Attitudes to RP の項、参照。

また、筆者が滞英中に親しくしていた Hilary Glasscock 夫人（St John's College, Cambridge 大学のフェロー Robin Glasscock 教授のご夫人で、London 大学、Oxford 大学で修めた後、英語教師として長いキャリアをもち、英語の変異に鋭敏な感覚をもった60歳代のイギリス人）も同様のことを指摘していたことを実体験として附言しておく。

10）Peter Trudgill, "Standard and non-standard dialects of English in the United Kingdom: problems and politics," *International Journal of the Sociology of Language* 21（1979），pp.9-24 及び Jenny Cheshire, "Indigenous non-standard English varieties and education," *Language in the British Isles*, ed. Peter Trudgill（1984），pp.546-58 参照。

11）Henry Cecil Wyld, *A History of Modern Colloquial English*（1936[3]），p.2 参照。

12）J. Wells and G. Colson, *Practical Phonetics*（1971）参照。

13）Susan Ramsaran,"RP: fact *and* fiction," *Studies in the Pronunciation of English: A Commemorative Volume in Honour of A.C. Gimson*（1990），pp.178-190 は有益。

14）RP の音韻的基準については Gimson, "The RP accent," *Language in the British Isles*, ed. Peter Trudgill, pp.45-54 参照のこと。

また、RPの揺れについてはLaurie Bauer, "Linking /r/ in RP: some facts," *Journal of the International Phonetic Association* 14，pp.74-79 を参照されたし。

15）①いわゆる「ウェルズ式発音記号の導入」：従来のジョーンズ式を第13版以降改訂した「ギムソン式」に、二重母音の細かな表示の一部を除いてほぼ一致。

②RPとGAを標準的発音として表記：RPが中心だが、地方訛りとして認知されている発音には†印をつけて採録。数種ある変異発音のうちで広く行なわれてはい

るが標準的とは見なされない発音には△印をつけて採録。英米語の発音に相違のある場合には‖を使って、英発音‖米発音 のように示す。また、この両者間に予想できない程の大きな相違の見られる場合には＊をつけて注意を喚起。

③同音異義語(homophones)と最小対立(minimal pairs)の表示：*eg.* bear vs. bare。

④強勢移動(stress shift)の表示：強勢の移動現象が起こった場合には、第一強勢から第二強勢に主強勢がシフトすることを◀の記号で表わす。

⑤後述の「意見調査」(opinion polls)結果の表示。

16) LPD (1990)の序文 xi を参照。

17) 日本英語音声学会『英語音声学』第 1 号 (1997) 所収の論文：pp.235-251。

もちろん、社会言語学的アプローチに則して言語変化を解明しようと試みる側からみれば、この程度の数値から一般的傾向を導き出すのは危険との指摘がなされるかもしれないが、辞書記述というものが一般に言語の実態を十分に反映しているかどうかの議論は別の機会に委ねて、とにかく英語使用地域外にあっての研究方法の一つとして考えてみれば、この趣の辞書記述に拠って抽出した傾向も分析対象としてあながち的(マト)外れでもなかろうと判断し、この手法を採った。

18) LPD 旧版 (1990) の精査結果については、部分的に拙稿 (1997) と重複する。

19) Laurie Bauer, *Watching English Change: an Introduction to the Study of Linguistic Change in Standard Englishes in the 20th Century* (1994), p.102 参照。

20) 大森 裕實「RPアクセントの指向性の変化に関する一考察 — LPDの記述に基づいて—」『英語音声学』第 1 号 (1997), pp.246-247 参照。

21) 大森 裕實「RPアクセントの指向性の変化に関する一考察 — LPDの記述に基づいて—」『英語音声学』第 1 号 (1997), pp.246-247 参照。

22) Paul Coggle, *Do you speak Estuary?* (1993)や David Rosewarne, "Estuary English: tomorrow's RP?" *English Today* 37:10-1 (1994), pp.3-8 はその好例。

23) John Wells, "Transcribing Estuary English: a Discussion Document," *Speech Hearing and Language: UCL Work in Progress* 8 (1994), pp.259-267 参照。

24) *ibid.*, web-site homepage (http://www.phon.ucl.ac.uk/home/estuary)参照。

25) Shakespeare, *Hamlet*, V. ii. 298-9に "He's fat, and scant of breath. Here, Hamlet, take my napkin, rub thy brows: The queen carouses to thy fortune, Hamlet."という御膳試合の一節があるが、この文中にあるfatの解釈が長く疑問であった。悩めるハムレットが肥満であるというのもいかにも合点がいかないからである。しかし、これを解明したのは合衆国オハイオ州のW.H. Dunn教授であった (1927年5月27日付 *Times Literary Supplement* への寄稿)。氏の講義中に女子学生が、そのfatの意味はsweatyの意味であると断定したからだが、その女子学生の根拠は、友人と夏に旅行したウィスコンシンの田舎で水をもらいに立ち寄った際に、農家の女性から聞い

たHow fat you all are! (=How sweaty you all are!)にあった。イギリスですでに消滅した言葉の意味が旧植民地アメリカの片田舎の方言に残っていた好例であり、方言学 (Dialectology)の大切さを語る逸話である (廣岡 英雄『英文学の方言』篠崎書林, 1965:「はしがき」参照のこと)。

参考文献

Aitchison, J. (1991²) *Language Change: Progress or Decay?* Cambridge U.P. (邦訳『言語変化ー進歩か, それとも退歩かー』若月 剛, リーベル出版, 1994)

Bauer, L. (1984) "Linking /r/ in RP: some facts," *Journal of the International Phonetic Association* 14, 74-79.

Bauer, L. (1994) *Watching English Change: an Introduction to the Study of Linguistic Change in Standard Englishes in the 20th Century.* Longman.

Crystal, D. (1984) *Who Cares About English Usage?* Penguin Books.

Crystal, D. (1988) *The English Language.* Pelican Books.

Fromkin, V.A. (1985) *Phonetic Linguistics: Essays in Honor of Peter Ladefoged.* Academic Press.

Giles, H. et al. (1990) "The Social Meaning of RP: an Intergenerational Perspective," *Studies in the Pronunciation of English: a Commemorative Volume in Honour of A.C. Gimson,* ed. S. Ramsaran, 191-211. Routledge.

Gimson, A.C. (1980³) *An Introduction to the Pronunciation of English.* Arnold.

Gimson, A.C. (1984) "The RP Accent," *Language in the British Isles*, ed. P. Trudgill, Cambridge U.P.

Gimson, A.C. and A. Cruttenden (1994) *Gimson's Pronunciation of English.* (Gimson の *An Introduction* の実質的第5版). Arnold.

Harrington, J., Palethorpe, S. and C. Watson (2000) "Monophthongal Vowel Changes in Received Pronunciation: an Acoustic Analysis of the Queen's Christmas Broadcasts," *Journal of the International Phonetic Association* 30, 63-78.

Hattori, N. (1994) "Stress Changes in Present-Day British English," *Synchronic and Diachronic Approaches to Language: a Festschrift for Toshio Nakao on the Occasion of his Sixtieth Birthday*, eds. S. Chiba et al., 213-18. Liber Press.

Hughes, A. and P. Trudgill (1996³) *English Accents and Dialects: an Introduction to Social and Regional Varieties of English in the British Isles.* Arnold.

McArthur, T. (ed.)(1992) *The Oxford Companion to the English Language.* Oxford U.P.

大森　裕實（1995）「英語の言語変化にみる社会言語学的要因」『外語研紀要』（愛知大学外国語研究室）19 号，1-11.

大森　裕實（1997）「RP アクセントの指向性の変化に関する一考察 － LPD の記述に基づいて－」『英語音声学』（日本英語音声学会）1 号，235-51.

Poldauf, I. (1984) *English Word Stress: a Theory of Word-Stress Patterns in English.* Pergamon Press.

Romaine, S. (1994) *Language in Society: an Introduction to Sociolinguistics.* Oxford U.P. （邦訳『社会のなかの言語』土田 滋・高橋留美，三省堂，1997）

Trudgill, P. (1974) *Sociolinguistics: an Introduction to Language and Society.* Penguin Books. （邦訳『言語と社会』土田 滋，岩波新書，1975）

Trudgill, P. (1979) "Standard and Non-Standard Dialects of English in the United Kingdom: Problems and Politics," *International Journal of the Sociology of Language* 21, 9-24.

Trudgill, P. (ed.)(1984) *Language in the British Isles.* Cambridge U.P.

Wardhaugh, R. (1992², 1998³) *An Introduction to Sociolinguistics.* Blackwell. (邦訳『社会言語学入門(上・下)』田部 滋・本名 信行（監），リーベル出版，1994)

Wells, J.C. and G. Colson (1971) *Practical Phonetics.* Pitman.

Wells, J.C. (1994) "Transcribing Estuary English: a Discussion Document," *Speech Hearing and Language: UCL Work in Progress* 8, 259-67.

Wyld, H.C. (1936³) *A History of Modern Colloquial English.* Blackwell.

（※各種の発音辞典，英語学辞典，一般英語辞典は割愛する）

（附 記）

本稿は平成 12 年度愛知県立大学学長特別教員研究費を受給して英国ケンブリッジで行なった学外研究の成果の一部を構成するものである。

（2001 年 10 月吉日　脱稿）